

審査の結果の要旨

氏名 尹 世遠

論文題目 日本近代病院建築における形式的基準に関する研究

本論文は、明治維新以来、日本の近代病院がつくられる過程において、その形式的基準を与えるものが何であり、どのような内容を表現するものであったかを検討し、未だ十分な研究がなされていないわが国の第二次世界大戦までの近代病院建築についての知見を得ることを目的としている。

本論文は、5章で構成される。

第1章では、問題の背景・設定を行い研究の目的を示している。すなわち小石川養生所と長崎養生所との比較を通して、「病院」が新しいビルディングタイプであり、その導入に当って、固有な形式とは何であり、社会的・制度的背景はそれに如何に表現されたか、そして第二次世界大戦後の「木造総合病院のモデルプラン」から日本の病院建築計画は開始されたが、戦前の病院建築設計論理は何であったのかを解明する目的である。なお、既往研究としては伊藤誠、ならびに新谷肇一のもの以外には、主だったものはなく、本論文の資料は貴重であると認められる。

第2章では、維新戦争における軍陣病院の経験が日本にとって初めての近代医療への接触であり、松本順によりその内容が医療・看護・衛生にまとめられたことを示している。各駐屯地に病院を必要とした陸軍では、軍医が中心になって作られた「鎮台陸軍病院一般ノ解」が初の総合的病院建築標準設計指針であり、パビリオン形式を実現した早期の例として熊本鎮台病院を挙げている。また平面形式や構造、ベッドの配置まで規定した明治半ばの「陸軍衛戍病院新営規則」の役割を説明している。一方、海軍では、佐世保や呉の典型的ナイチンゲール病棟を持つ病院は、海軍医長の高木兼寛らが留学したセント・トーマス病院をモデルにしたと判断されること、そして高木自ら看護学校を附設した東京慈恵医院を設立し、全く同じ形式の病棟をつくっていることを示している。海軍病院のナイチンゲール病棟と施療診療を行った東京慈恵医院とは以後日本にほとんど見られない形式であり、この形式の病院の存在を示したのは本論分の成果の一つと認められる。

第3章では、制度により病院がどのように規定されたのか、病院側からの要求が制度をどのように変化させたのかを、避病院と一般病院とを通して説明している。戦前の病院の特徴は公立病院に比べ圧倒的に多い私立病院と小規模病床の病院の存在であり、利用患者が中等・上等の階級であったことを述べている。避病院は伝染病隔離病院として制度的に設立を義務づけられていたが、医療・看護の具体的な内容はなく、

建物は重症・軽症・快復患者を分けて収容するために短時間で簡便に建てられるあばら屋でよいとされ、ただ隔離収容する場所に過ぎなかった。結果として、避病院は人々に恐怖と嫌悪を懐かせるものになり、明治20年代後半にこのことが問題視され、ようやく避病院の標準的設備を制度的に規定するようになった。そして、これ以降避病院は伝染病院へ、そして市民病院への変貌を述べている。一般病院の制度的規定はゆるかったが「医制」が入院料の等級別徴収を規定したことは、済生会など施療病院と実費診療所における病床規模と病室構成に見られるように以後の病室構成に影響を与えたとしている。

第4章では、建築計画論の中での病院建築に関する論議を扱っている。病院が最新の医療器械など設備を完備する「完全病院」を目指すようになったこと、進歩する医療技術にあわせて模範病院を思考したことを示している。次に、模範病院として大きな影響を与えた日本赤十字社病院、特に設計者の片山東熊が病院建築の型について論じたことに注目し、日本赤十字社病院において、各棟を回廊で繋ぐ分散配置と片廊下式病室構成、小病室主義という、日本の病院建築の典型が示されたことを確認している。その後、帝国医科大学病院の新築病棟において、各診療科別に独立した病棟が構成され、パビリオンの自立性が論議されたことを述べている。大正期にはいと、病院計画の中心的な換気と採光といった（衛生）問題は、設備機械の完備による解決を指向し、代わりに「患者の慰安」が据えられたことを指摘している。高松政雄のホスピタル・アパートメントという病院の理想は、病室を徹底的に「患者の慰安」から発想したものであり、医療・衛生・患者のいずれの視点からも、大病室に対する小病室の優位が根拠づけられることになった。その時代に東京同愛記念病院を設計した近藤十郎は、何より看護能率を病院の中心問題に据えることを主張し、ナイチンゲール病棟を復活させ、同時に病室形式としてのパビリオン型が備えうる利点（自然換気と採光含む衛生・療養環境の向上と看護・監督のし易さ・病棟単位の構成、さらに経済性）を明確に主張したと述べている。すでに病院建築は都市部での建設を前提として、耐震耐火の面からブロック型を中心に展開していたが、戦後吉武泰水らによって提示された総合病院のモデルプランは、看護単位の確立という視点から再びパビリオン型病棟を採用していることに言及している。

第5章では 各章のまとめと全体の結論としての考察を行っている。

以上のように、本論文は従来注目を欠いていた明治維新から第二次世界大戦に至る間の日本における近代病院建築の設計法や計画論について、標準設計によって形式的基準を与えた場合とモデルとなる病院から直接最新の知見をもとにその形式を取り入れた場合の典型的な事例などを比較するなど、各種資料を収集・分析し、その構造を究明して基本的な知見を示し、建築計画学の発展に大きな寄与をしたものである。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。